

魚つかみ (漆原町)

昔は、半日雨が降ると田んぼの真ん中を流れる大川と内川の水が土手を超えて満ち溢れ、五月晴れの田んぼは一面大海のようになって、とてもきれいでした。

その中をすーい、すーいと大きな鯉やなまずが何匹も泳いでいる光景は気持ちよく、誰でも魚をつかみたい気持ちをかき立てられました。

田んぼの水は浅くて大きな鯉がうようよ。

「あー、あー、あつこや、あつこ。」

「そーこー、そーこー。」

と大人たちは目を丸くして喜びました。

他所のもの(漆原地区以外の人)は夜になると懐中電灯の明かりで逃げ回る魚を追いかけ、大きな竹かごですくってつかみました。

夜が明けると、さあ大変。

「どこのだれがこんなことしたんにやる」

と、怒ってみても後の祭り、田植え前の田んぼはクチャ クチャでした。

しかも、忙しい田植えの真つ最中の、漆原の男たちは、大水の引いた後のたまり水の中に、逃げおかれてかたまっている鯉やなまずを見つけると、思い切り一度に何匹もつかんで、キヤー キヤー 言つて喜び合いました。

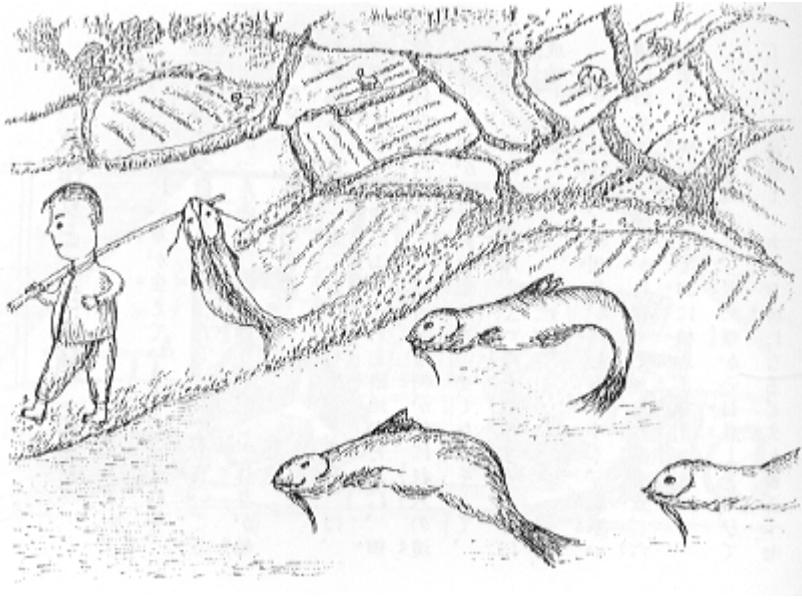
一方、腰の痛みに耐えながら、一生懸命うつむいて田植えする女たちは、手元の苗が無くて、

「おーい、おーい、苗 苗 苗がなーい。」

と大声で呼んでも男たちは知らん顔、田植えを忘れて魚に夢中になっておもしろがっていました。

大きいなまずをつかんで棒に刺し、ぶらぶら得意そうに肩に掛けて、笑いながらのこのこ帰って行く人もいます。

こつちの人は鯉を六匹、あつちの人は鯉となまずを十匹。



「緋鯉もいたんにや。」  
こえ

と声をはずませる人等々……………。

鯉は、腹に卵を一ぱい持って産卵期に川を上つてきた見事なものばかりでした。

なまずは太くて長いひげをつけた頭の大きな魚で、大人しかつかむことができませんでした。

昔の病人は鯉の生き血を飲んで勢力をつけたり、母乳がよく出るようにと鯉の味そ汁を飲んだりしました。また、なまずのかば焼きは香ばしいにおいが戸外に流れ、道行く人の食欲をさそいました。このように川の魚はこちそうの一つであり、大切なたん白源でした。

昔の農家の人は田や畑で米や野菜を作り、川魚をつかんで自給自足の生活を営んでいました。